第拾参號

三之二

萬葉集卷第三

雜歌

天皇御遊雷岳時作歌一首 或云獻忍壁皇子

柿本朝臣人麻呂

皇者神二四座者天雲之
雷之上尓廬為流鴨
高光我日皇乃敷座
一云天下乎治賜者神乍座者雲隠
伊加上山尓宮敷座
高照我日皇乃敷座

天皇元正也 雷岳大和也
すめろきは神ながらませば
或曰雄略天皇乃御時被
山乃形ちをとかく
ほめたるかそをいへ
仙寓
三諸山乃名也次乃ふ
雷山小文安ますと云り
日本紀十四日大泊瀬幼武
天皇御宇七年秋七月甲
戌朔丙子天皇詔于
部連緑贏曰朕欲見
三諸岳神之形汝脅
力過人自行捉来緑贏答曰試往捉之乃登三諸山捉取大虵奉示
天皇天皇不齋戒其雷陲陲目精赫赫天皇畏蔵目不見却入殿中
使放於岳仍改賜名為雷焉元正天皇山いりつちもよ雑宮を

作ふるをあやしび乃雷乃ようなきいますとよめり雷の上は
こもりなく神ながらませばと神愛乃やうふいひなせり注乃無壁

賜志斐嫗御歌一首

天皇御製

不聽跡雖云強志斐能我強語
いなといふをしひのりもちまつるをも
比者不聞而朕戀尓家里
このころきこえずわれこひにけり

奉和歌一首

志斐嫗名未詳

不聽跡雖謂話礼
いなといふをかたりこのれとこそ
志斐伊波婆強話登言
しひていはせばしひてのるとも

應詔歌一首

長忌寸意吉麻呂

大宮之内二手挟而 聞きけん綱引為跡
おおみやのうちにたずさわり きこしめしつりひきすと
網子調 流海人之呼聲
あごとのののるこえの
あごとのののるこえの

長皇子遊獵路池時作歌一首并短歌
ながのみこのかりぢのいけにあそびしときのうたひとつならびにみじかうた

柿本朝臣人麻呂
かきのもとのあそみひとまろ

八隅知之 吾大王 高光 吾日乃皇子乃 馬並而 三獵立
やすみしる わがおおきみの たかひかる わがひのみこの うまなめて みかりたつ
流 弱 薦平 獵跡乃小野乃 十六社者
ながる わかこもを かりしとのおの しじのもり
伊波比拝 四時自物 伊波比廻 已曽
いはひおがみ よもつしまつを いはひめぐり いまそ
礼 伊波比拝 而 鶉成
いやる いはひおがみて うずらなす
伊波比毛等保理 恐久等 仕奉而
いはひもとほり かしこくと つかへまつりて

久堅乃 天見如 久 真十鏡
ひさかたの あめにみるごと くまそかがみ
仰 而雖見 春草之 益目頬四寸
あおぎて みれどはるくさの いやめづらしき
吾於冨吉美 可聞
わがおほきみかも

反歌
かへしうた

久堅乃 天歸 日平 網尓刺
ひさかたの あまにかへる ひをあみに
我大王者 蓋 為有
わがおほきみは けだしなさるる

皇者神 尾之 坐者 真木之立
すめろきは かみにしませば まきのたつ
荒山中尓 成可聞
あらやまなかに なしてかもあらむ

かりぢの小野陸奥を
かりぢのをのみちのおくを

十六四時自物 皆鹿也
しし よものしまつを みなしかなり

冬緒 吾大王 高光 吾日乃皇子乃 馬並而 三獵立
ふゆごもり わがおほきみの たかひかる わがひのみこの うまなめて みかりたつ
流 弱 薦平 獵跡乃小野乃 十六社者
ながる わかこもを かりしとのおの しじのもり
伊波比拝 四時自物 伊波比廻 已曽
いはひおがみ よもつしまつを いはひめぐり いまそ
礼 四時自物 伊波比拝 而 鶉成
いやる よもつしまつを いはひおがみて うずらなす
伊波比毛等保理 恐久等 仕奉而
いはひもとほり かしこくと つかへまつりて

久堅乃 天見如 久 真十鏡
ひさかたの あめにみるごと くまそかがみ
仰 而雖見 春草之 益目頬四寸
あおぎて みれどはるくさの いやめづらしき
吾於冨吉美 可聞
わがおほきみかも

反歌
かへしうた

久堅乃 天歸 日平 網尓刺
ひさかたの あまにかへる ひをあみに
我大王者 蓋 為有
わがおほきみは けだしなさるる

皇者神 尾之 坐者 真木之立
すめろきは かみにしませば まきのたつ
荒山中尓 成可聞
あらやまなかに なしてかもあらむ

華蓋 黄帝 征涿鹿時當帝頭上有五色雲因其所造也順和名云
はながさ こうてい たくろくをせいするとき ていのうえにごしきのくもあり そのところによりてつくるなり わやうみょうにいわく

すめろきは神にいますと山寺乃 イニハ山寺乃或本云反歌一首 山寺乃
山寺漁人乃 有而毛 無苦有而 清
やまでらの いさりびとの あれてもも なくあれて きよき
皇子乃 御食乎 時自物 水 潜 鳥
みこの みけをと ときじもの みづくくる とり
皇子乃 御馬乃 口 奈豆久 鳥
みこの みまの くち なづく とり
皇子乃 御笠乃 山尓 座 鳥
みこの みかさの やまに ます とり
皇子乃 御笠乃 山 黄葉 散 鳥
みこの みかさの やま もみち ちる とり
皇子乃 御笠乃 山 黄葉 散 鳥
みこの みかさの やま もみち ちる とり

不側乃程有れい高き山をし海とあるとこゝもあるを此をかくせうとおもふ
ゆゑなるべし

遊吉野時御歌一首

弓削皇子

瀧上之三船乃山尓居雲乃
常将有等和我不念久二

三吉野之御舩乃山尓立雲之
一云みよしのゝみふねのやまにたつくもの
常将在跡我思莫苦二

此一首出柿本人麻呂集

奉和歌一首

春日王

者千嵐尓麻佐武白雲毛
三船乃山尓絶日安良米也

被遣筑紫時渡水嶋歌二首

長田王

如聞 真貴久奇
神左備居賀許礼能水嶋
葦北乃野阪乃浦従船出為而
水嶋尓今立待将去浪立莫勤

和歌一首

石川大夫關名

奥波邊波雖立和我世故我
三船乃登麻里瀾立目八方

水嶋和名曰肥後菜池郡

仙曰肥後風土記曰球磨
乾七里海中有嶋名曰
水潟潟出寒水逐潮
高下其里人毎候潮
来汲此水乃炊飯
甚美他処所汲
不及此水

仙曰肥後之国
なるゆゑハ物こと加波立と
おもふ、まこと〳〵ちかし

我せこに妹こゝ

らも漕ぎ乱れ行き舟も多に泊てぬ浜も多にと云ふやうのもいと賑はゝしき事なり乃ち後に聞けば右今案従四位下石川宮麻呂朝臣慶雲年中に任大貳に又正五位下石川朝臣吉美侯神龜年中に任少貳に不知両人誰作ト此歌焉

又作歌一首　長田王

集人乃薩摩迫門乎雲居奈須遠毛吾者今日見鶴鴨

羈旅歌八首　柿本朝臣人麻呂

三津埼浪矣恐隠江乃舟公宣奴鳴尓

珠藻刈敏馬乎過夏草之野嶋之埼尓舟近着奴

妹之結紐吹返

荒拷藤江之浦尓鈴木釣白拷乃藤江能浦尓伊射利為流

一云おとめをとすまくおもふ

島我埼爾伊保里為吾等者

一云おとめをとすまくおもふ

敏馬乎過而夏草乃野嶋之埼尓舟近着而

一云おとめをとすまくおもふ

粟路之野島之前乃濱風尓

妹之結紐吹返

荒拷藤江之浦尓鈴木釣

一云おとめをとすまくおもふ

白水郎路香将見旅去吾乎
稲日野毛去過勝尓思有者
いなび野もいきすぎがてに思ふらめ
戀敷可古能嶋
心ゆるこしきかこの島の子ゆ
留火之明大門カ日哉
こゝろひのあかりのせさふかる日かや
標特別家當不見
しめわるとまんいへのあたりを見ず
天離夷之長道從戀來若
あまざかるひなのながぢをこひ來れば
自明門倭嶋所見
あかしのとよりやまとしまえゆ
一云家門當見由
一云やどのあたりしえゆ

こゝらくひのあたりの大門古郷のあたりもしおぼえねどよりあひの金葉集にまで載たれば後も見るべきことのせをこゝにかきそへたれば玉葉集にあれ方さほるべきのせをかゝ

そこふかくおもひそめてし皆山万葉乃哥うらやまし
乃大門をねがふ心ふかくおもひそめてし哥の心ハ灯のあかりの松ほの
日比着様懐ふ胸をこゞさ小家乃あかりまでもとゞまらぬ心を
あらはしたるなり今三こゝにかゝれたることを神中将云明石の浦
なれハ遥なるやうなれども近くふかき入江なれハ遥なるやうなれども
乃山なれバ近きやうなれども日本岡をやすみしゝわごおほきみ
るとかれこれ別して大和乃国をよめるハ誤なり武田氏云ハ淡島成一
首中の
飼飯海乃庭好有之刈薦乃
けひの海にかりこもを乃
亂出所見仙人釣船
みだれいでゆるあまの釣船

一云
武庫乃海
むこの海の
細江尓波有之伊射里為流
ほそえには
海部乃釣船
あまの釣舟
浪上従所見
なみのうへゆ
香具山歌一首并短歌遷都寧楽後悼
旧作此歌歟

鴨君足人

天降付天之芳來山霞立
春尓至婆松風尓池漣立而
櫻花木乃晩茂尓奥邊波
鴨妻喚邊津方尓味村花和伎
百磯城之大宮人乃退出而
遊舩尓波楫掉毛無而不樂
毛已具人奈四二

一云天降就神乃香山打靡
春去來者櫻花木暗
左右尓入乱飛

仙田けいの海部おし
小そくいとい海おし
風吹ちらすを見
とそ 但彼兵ハみ
れいでそゆともむ
むこのうこの
武庫いほこ
舟の日和こ
いりの海人舟こ
庭の面の舟うんこ
いりたりくおあら山
仙のおそちりくと
云詞 天乃芳來山こそ
えの香具かれるまれ
いこころりえの香の
りれいのをと

四ノ一 五来八重九
三毛天乃かこいりち
まるくてえの香の
にちりて云んこと但大
和風土記ニ天上乃山地
よおちて香ことる
こいり里ハ天降ケこ
ハりくかるや
このれこけ
てそをきこころけ
おこりいかもよりひく
おこりいかもよりひく
かおめちり とにるみ
香山西至石上山以舟二百隻載石上山石順流控引於宮東山累石爲垣 ここれ
舟乃多曼幸乃文化ま
へりまあちむ
近江の
味村あちのむ

茂 松風冊 池浪嫺 邊都遍
ころみれ凡よ地活ちく
者阿遲村動 奥邊者鴨妻
よいちむ
喚 百式乃大宮人乃
よりくちのおりやん乃
去出榜來舟着笇楫毋
ゆきそくこさこみねいさ
無而仇支之毛榜與雖思
おくてさよこんこと

ひく山乃狭狭帝と申せる御持統八年藤宮に元明御宇
奉る小要遷都のちいまだ路頭の子おえく苦舟拾ひせ舟と
掛(カケ)竿としるくさゐ山と一云神乃ひく山仙日にのぼりくもれ
い神として渡るる拾ふれいようくく弥の口くちとひ
さいくうくうといふ山こさら舟ハ迂拾ぬ時大きく人乃こころよ
拾ひくこゝ舟八今ホこゝろと平癒とるくてさゐ云
さゐもいさゐ一とも山いとも日日お通ふとい時宮
人こうすのくもとる往池乃舟も遷都の
ち人こう甚くもとる
くをるくうくと舟の
うふすむとも一云あ
いつゝも弥さゐくるう
祇回む拾ふうと古本小
ゐくもとゐまの拾ふ業
日む拾ハ拾の次浮のさき

反歌

人不榜有雲知之潜爲
人こうすのくもとるくさゐする
鷲與高部共船上住
をふこうくとみねのうくふすむ
何時間毛神左備祁留鹿香山之
いつのとかこうさゐるうかくも乃
鉾杉之本尓薩生左右二
むすまうもとかこけむすまて
多(タ)気(ケ)ノ
獻新田部皇子歌一首并短歌 新田部皇

乃くく細くすまとる
生八年(ヒノエイヌ)庚戌(カノエイヌ)淳仁日
天平(テンピョウ)七年九月薨

柳本朝臣人麻呂

子天武天皇子天

八隅知之吾大王高輝
やすみしるわのおおきみの
日之皇子茂座大殿仁
ひのみこしけくますおおとの
於与
うへかくらひいうしも
天傳来自雪仕
久方乃
ひさかたの
物継来跡
ものつきくとと
常世
ことよさるまて

反歌

矢駒乍鈴乎木之
いこまやまこえくとも
雪驟(ユキシマキ)零(フ)
雪乃
ゆきのうさまよ
不見落
みえまくも
仙人(ヤマビト)乱(マガ)
朝仙(アサヤマ)尓(ニ)樂(タノ)
毛
山本乃山乃仙之八やうりもこよりも矢鈴山をさらよみくこの矢鈴と共一
をやツリロよむもや空く矢鈴とけりんと古本ハいこやくもよむうす鈴と駒

こゝの幸の表一あるやう雪乃うさきすとい雪中ようさきさむまる柔く
拾與のやうさきさる八耳ちきる鄭縣うえ詩思八瀬橋の雪中駅あの
上こ立さつる俤と仙点乃矢狗山八大和し雪もそふふうえ
るこあのてくとこよりまとみるや但おいてくこうみて
古馬をとり作ん

従近江國上來時作歌一首

刑部(ヲサカヘノ)名 無麻呂

馬莫疾 打 莫行 氣並 而
るおいくうちておゆきこうきこうて
見巳 毛 和我歸 志賀尓 安良七國
見くしわうこん志なくよつるふ

従近江國上來時至宇治(ウヂ)河邊(カハヘニ)作

歌一首 柿本朝臣人麻呂

物 の部 能 八十氏 河 乃 阿白 木尓
もふのやうちのあろまふ
不知代經 浪乃 去邊 白 不毋
いさよ浪よりへちくす

又山吹の生ふる井の家の水と名を問こ家を知くみのいて
細代本小波乃かれるやすよりく皆ゆらくる浅絡空(ソラ)吉すもと
いの松る竟いさよふこうやすよふと 雲ゞ波の部乃八やうち
乃空流もる波乃りるまにくるまと 川乃松詠(ヨメル)こえゆる波り

一首 長忌寸奥麻呂(ヲキノイミキ)

苦 毛 零来 雨可神 之 埼
くもりもみくるあうさき乃さき
狭野乃 渡 爾家 嘗 不有 國
さのわうよ以とあくに

一首 柿本朝臣人麻呂

淡海乃海 夕浪千鳥 汝 鳴 者
おうみの海ゆふなみちとりなけハ
情 毛 思努爾 古 所念
こゝろもしのにいにおもゆ

或沢に紀伊三栖浦をよめる歌八集夕拾八雲ゆ業
行ふ乃うこくるみそ近江乃(サヽ)名(テ)をさる歌のあや心とこのう

御歌一首　志貴皇子

采佐佐婆波木末　求跡足日木乃
山能佐都雄相不来鴨

故郷歌一首　従明日香遷藤原宮後作此歌一首

長屋王

吾背子我古家乃里之明日香庭
乳鳥鳴成不得而
屋部坂歌一首

阿倍女郎

人不見者我袖用手将隠乎
吾背子之振乃小山下
赤乃曽保船榜所見
櫻田部鶴鳴渡
年魚市方
鹽干二家良之鶴鳴渡

所焼乍可将有石眼而来
羈旅歌八首

高市連黒人

客而物悲敷山下
赤乃曽保船榜所見
櫻田部鶴鳴渡
年魚市方
鹽干二家良之鶴鳴渡

仙日古五人乃

昭わすれく河小舟のゆくをえてこそ仙田わけといえん風很よし
ともあと来るや　まゝ紙注同題乃羇旅乃字左傳杜注客也ことを
ひろく画へりきわる　桜田八雲抄紀伊ことばの仙日あゆちる紀伊ことと
きくけし山うちて　四極山寺越見者笠縫之
八雲抄云三河山をあ　鳴榜隠棚無小舩
山寺古今六帖云くる
まにかさゆひの　磯前榜漕手廻行者近江海
顕船日笠結いをお
縁いをねるこ棚
とよねいし母の棚の
いう内きをこぎめれ
是古点　勘点ハこぎ
今それいこともなき重家
おもこぎくめれなと云くやうハ八十とうけしおりくのみをしこと
我日秘抄名ハ近江に水山とうり湖小舟る枚乃多く数八十の漕と云さいハ多く
わりいねいひとの　ひとの漕近江と八雲おもよくこぎえ

万二上 十

何處　吾將宿
いにこふりわりやとりせんる高嶋乃
勝野原　不此日暮去者
妹母我母一有加毛三河有
ちのくくふ山自くれるし
二見自ニ道別不勝鶴
みちのくらもわれるしる
一云水河乃二見之自道別
者吾勢毛吾毛獨可文將去
速来而毛見手益物平山背
高槻村散去奚留鴨
石川少郎石川朝臣君子号曰少郎子
然之海人者軍布刈鹽焼無暇
志乃なのめのわりさいやまなみ

一首

仙日山城乃宇治橋封

髪掻乃伽椰 或 名不見 久尓

かけをそうかもなく

二首

高市連黒人

吾妹兒二諸名野者今見都名次山

わぎもこにもろなの原はいまみつつなづさやま

角松原 何時将示

いつのときめさん

去来紀等倭部早 白菅乃

いざやこらやまとべはや しらすげの

真野乃榛原 手折而将歸

まのをさはらをたおりてゆかん

髪掻と云を下着と云ふるは心得ず

新勅撰入

髪掻小柳 こやなぎ

すでに京極黄門乃ち彼人の世称に依乃歌なれば

あるべし 然れども此歌の上句ともに古歌の

寺殿二条殿等に於て此歌を聞ば

寺心い祇田い集 髪掻小柳と云りなほ髪掻と捨ていふべし

白菅と云 郭知玄菅と釋せり 白花似茅無毛とつり

やはらかにい婦をいさよふ時なれば大和辺野の萩をもやくおりてゆかん

答歌

白菅乃真野之榛原 往左 来左

ゆくさくるさ君社見良目 真野乃榛原

さやにわれおもはめやも

一首

春日藏首老

角 隘經 不遇 泊瀬山

何時毛将超 夜者深尓通都

いつもこえんよをもふけにつつ

一首

高市連黒人

黒 吾乃得名津尓之而見渡皆
すみの江乃えなつまもて見渡せハ
六兒乃泊 従出流松人
むこ乃とまりとおもふ山もひし

一首 春日藏首老

焼津邊 吾去鹿湖駿河奈流
阿倍市道尓相之兒等羽裳
ほのいちしるくなりにけるかも

往紀伊國二超勢能山時作歌一首

丹比真人笠麻呂

栲領巾乃懸巻欲為名平
此勢能山乎妹与越者

一云 伊香尓安良牟

和歌一首 春日藏首老

名と云紀伊国の妹の山
うち渡すく背の山を
山背の山を妹と来て
山背の山を妹とうて
こえくなんの
あらむ
よろこきろもち
笠乃嶺の名を
かへりてよき名乃夏草
うし背の山を妹くよ
ぬさをせとこ
家ゐしのも助けこ韓退
之の雲横秦嶺家何堵

宜 奈倍吾背乃石之頭来尓之
ろろまへわりせりろろおひまろ
此勢能山平妹 著不喚
このせやまを妹とハよろ
幸二志賀一時作歌一首 不審行幸年月一

石上卿 闕名

此間為而家八方何處白雲乃
棚引山平越而來二家里
よろひくやまをこえてきまろり

一首

吾命之真幸有者亦毛覧
わりのちまもさきくハもうん
志賀乃大津尓縁流白浪
ちりのおりかりよする
初月歌二首 間人宿禰大浦

天原振雛見者白真弓
張而懸有夜路者将吉
椋橋乃山平高可夜隠尓
出来月乃光之寸
勢能山詞一首

小田事

真木葉乃之奈布勢能山之奴波受而
吾超去者木葉知家武。

四首

久乃天之探女之石舩乃

志かれ乃チ川の河まめ　堀のひろるこけの浦あり七　あまめハ女童さ　童蒙
松云くは川と町ミギを云さ　仙臼細き縄まて拇入る物ゆて田舎れぬの男え
風をは予おき川さ了波　風はくしろをと風をいそといふて之
すみの江のまつ乃松原　さとを川カ予とハ天子を神としてまつりむかりの天
子をやすむるへし　住吉ハ神功皇后神のおのれに祝ひまつる社也
いかろ乃きよみの浦き
類聚万葉ニハ清見か崎
乃といへハいかさるハ邪
の名也　ハ雲おおに擬之と
ろとゆるふハゆしろ
尋究りに旅愁を
ひろえれとあつね
国司ハ分憂の職とて
帝の民をあつかるなさ
せ給ふをかて国司に民
と惠せ給ふ帝と治

任上野國司時至駿河浄見埼作歌二首　田口益人大夫

296
盧原乃　浄見乃埼乃　見穂之浦乃　寛見物念毛奈信
いほはらのきよみのさきのみほの浦の　ゆたかにみえてものおもひもなし

297
晝見騰不飽田兒浦　大君之命恐夜見鶴鴨
ひるみれとあかぬたこの浦おほ君乃　みことかしこみよるみつるかも

一首
弁基　或云春日藏首老之法師名也

と共小すまとしてちき
まハうる命令を拇と
ケ明まく故まれの極
溌人と定任せさと宜之
てとゆかす扮ゐすれ
志き浦をとゆるゆへを近
只見公程不見春と熊
濡登の役をつとめ忍
まつち山ゆをてけて
八雲わ云ハれ清角田
川下総をこゆつち山白
かく山のすれえ志き
類聚ニハけちハうさお
し南をわつねと
和ス新臣ニハやむわり
こそ八隣まるく伝

298
亦打山　暮越行而　廬前乃　角田河原尓　獨可毛将宿
まつち山ゆふこえゆきていほさきの　すみた河原にひとりかもねん

大納言大伴卿未詳旅人之　一首

299
奥山之　菅葉凌　零雪乃　消者将惜　雨莫零行年
たく山乃すかのはしのきふる雪の　けなはをしけん雨なふりこそ

駐馬寧樂山作歌二首　長屋王

300
佐保過而　寧樂乃手祭尓　置幣者　妹乎目不離　相見染跡衣
さほすきてならのたむけにおくぬさハ　いもをめかれすあひみしめとそ

301
磐金之　凝敷山乎　超不勝而
いはかねのこりしく山をこえかねて

哭者乎泣 衣色尓 野出 八方

ねのいまくらもいろよくてめやも

一首 中納言安倍廣庭卿

兒等之家道 差間遠 鳥野干乃

こらのいつちやときとねたまれ

夜渡 月尓 散六鴨

我わたる月ふさりひあへんかも

右今案ニ妻の相去のさとにかりて妻のそを悲き泣雲とあむ心

さてすまくちものさけ 兄妻云ふ栗山乃峠也 乃つめとうよくこせ

ちめとこそこ一説もふる山のかりこも神よねさもも心 依傷哉屋主

乃家之依傷の意太古ことの人くめの意すいれくもの子妹をこせと我

こそわのこりもくの疑心玉篇二堅也 こそ神代紀にてしりねの乃様心こわ

ちくに凝敷と云出根のこと云けるこころこそも同心 湯帝の心はもくしの

越りきみしあす家後のをさうりかきとうちくるとされも

割りきるとへ人云ふしこと心うりもくいたる鳥心但馬にてちきさ孤周

こくうつちやくもきこくの妹をえこやくをれのゆ月ときありけり

下二筑紫國一時海路作歌二首

柳本朝臣人麻呂

名細乎為 稲見乃海之奥 津浪

名くまきいまみのうらなおきりるみ

千重尓 隠 奴 山路 嶋根者

ちへりなれぬやまとちかねい

大王伊可牟弥之 遠乃朝 蟻 通

すめろきの乃とをのみくありつかふ

鴨門平 見 者神代之所思

ちやしまを見れは神代しそおもふ

近江舊都歌一首

高市連黒人一云小辨作 也何人未詳

加是故尓 見 跡云物乎 樂浪乃

つぬかこそ見つとおもふ樂浪乃

舊 都ノ辛令見作 本名

ふるきみやこを見せつるかも

幸伊勢國之時作歌一首

安貴王 春日王皇子之子

伊勢海之奥津白浪花尓欲得
妻而妹之家妻
為見尓来之甲斐乃浦尓不寄有
往紀伊國見三穂石室作歌三首

博通法師

皮為酢寸久米能若子我伊座家留家牟
吾乎須支久米能和可古我波太須酒
三穂乃石室者雖見
不飽鴨

安礼尓家留可毛

一云奈良尓有家留可毛

常磐成石室者今毛安里家礼騰
住家類人曽常無里家留

石室戸尓立有松樹汝乎見者
昔人乎相見如之

詠東市之樹作歌一首

門部王

東市之植木乃木足左右
不相久義宅倍吾慈尓家里

従豊前國上京時作歌一首

鞍作村主益人

梓弓引豊國之鏡王

不見久有者已戀數年鴈
とくくひさかたの戀しけれども
敝使改造難波都時作歌一首

式部卿藤原宇合卿

昔社難波居中跡所言美来
むりとそおもへこれくめ
今者京引都備仁鶏里
いまそ人やへうつりよそりし

諸生朝望小山市小舎之各郷の化俗経書相続の買売
或山心擺下之談論之三輔黄圖之云山東市の樹しけれる
被曰心之云々是年々枝之落之れるまこまの乃
繁之葉まてふ心之云々是故我心之変之
つくさりくるふ仙曰珍之玉の淺山之云ふ豊前風土記曰河郡鏡山
在郡東昔者氣足姫尊在此山遥覧國形勅祈云天神地祇為我
助福便用御鏡安置此處其鏡即化為石今在山中因名鏡山至東

上句ハ序ニシテ久シクハ云ヒ久シクノ心ニツヅケンカタメニ置キシ
ツヅケヨウヒクトヨムヘシ花ヲ見シ人ノ変ヲ言ヒテ
ムナシクナルヲ歎ケルナリ今ハ奥ヤマヒナドニ
仁徳帝ノ皇后ノ歌ヲヤリトテ
ナニハツニサクヤコノハナフユコモリ
今ハ春ベト咲ヤコノハナ
ト日本記ニ九天武天皇十二年詔曰凡都城宮室非一處必造
二ノ宮ハカラヒ有テ先ツ難波ヲ都ニ
スヘシトノ詔ニ依テ造ラレシ宮ナリ

一首 土理宣令

見吉野之瀧乃白浪雖不知
語之告者古所念

一首 波多朝臣少足

ふるさとの道有能登湍河
ふるせの浪越てゆくとも
典音之清多藝通瀬毎亦
ものさやけさしつゝもあらむ

暮春幸芳野離宮時奉勅作歌一首

315

并短歌　中納言大伴卿　諱旅人

見吉野之芳野乃宮者山可良志貴有師

清有師

316

永可良思

317

318

伊豆ノ走湯ノ権現ノ別当ノ子ニテ幼ヨリ学問ヲ好ミ和歌ヲ善クス
サテ此ノ山ハ古ヘ富士ノ神ノ住ミ給ヒシ所ニテ山ノ形モ富士ニ似タリ
ト云ヒ伝ヘタリ日本紀ニ不時香果ノ事アリ
一ツ乃ハ一ツ伏ノ内ニ咲ク花ニテ百人一首ニ云ヘル山田ノ面ノ
ナルヘシ其ノ花ヲ一ツ乃ハ一ツ伏ト云ヒ伝ヘタリ
根乃雪ヲ分ケ見ル心地シテ
此ノ山ハ雪ノ面白ク見ユル故ニ名ヲ富士ト云ヒ伝ヘタリ
ト云ヒ伝ヘタリ
駿河ノ国ニ有リ
甲斐乃国ニ有リ
上古乃世諺今ニ残リ
伊豆ノ国ニ有リ
仙女乃住ケル
薬鉢ニ成テ用ヒ
仙女ノ住ケル
皆勢幕(ミナセバク)ニ用ヒ
通(カヨフ)ノ道ノ
甲斐乃駿河ノ
諺(コトワザ)不盡山歌一首并短歌

笠朝臣金村

甘南備(カムナビ)乃 甲斐乃國乃 打縁(ウチヨス)流 駿河能
國與巳知(クニトコチ) 見乍(ミツツ)乃國之 三中(ミナカ)從 出之有
不盡能高嶺者 天雲毛 伊去(イユキ)波伐(ハバ)
加利(カリ)飛鳥 毛 翔(カケ)毛 不上(アガラ)
火乎(ヒヲ) 雪以(ユキモ) 滅(ケチ) 落雪乎(フルユキヲ)

火用(ヒモ) 消(ケチ)都(ツ)通(カヨフ) 言不得(イフヘカラズ) 名(ナ)
不知(シラ) 靈(クシ) 座(マス) 神(カミ) 香聞(カグヤマ)
石花(セノハナ) 海(ウミ) 跡(アト) 名付(ナツケ) 而(テ) 有毛(アレモ) 彼(カノ)
山之(ヤマノ) 堤(ツツミ) 有(アル) 海(ウミ) 曽(ソ) 不盡(フジ) 河跡(カハト) 人乃(ヒトノ)
渡毛(ワタルモ) 其山之(ソノヤマノ) 水乃當(ミヅノアタリ) 焉(イヅク)
日本之(ヒノモトノ) 山跡國乃(ヤマトノクニノ) 鎮(シヅメ) 十方(トモ)
座(マス) 神(カミ) 可聞(カモ) 寶(タカラ) 成(ナス) 有(アル)
山可聞(ヤマカモ) 駿河(スルガ) 有(アル) 不盡(フジ) 能(ノ) 高峯(タカネ) 者(ハ)
雖見(ミレド) 不飽(アカヌ) 香聞(カグヤマ)

反歌

不盡嶺尓零置雪者六月
十五日消者其夜布里家里
毛曽零計牟

詠不盡山歌一首

高橋蟲麻呂

布士能嶺乎高見恐見天雲毛
伊去羽伐田菜引物結
至伊豫温泉作歌一首并短歌

山部宿禰赤人

皇神祖之神乃御言乃敷座国
能尊母貴寸玉鉾乃道乎
之盡湯毛

乃安云石花二字ト一ツ
ニシテ読ムベシ
ヤスケクト訓ムモアリ
乃安云鎮守
乃心ヲ玉桑ノ木ヲ祈ト云
ウカヒヲカヲ
仙台六月十五日ニ雪消
テ子ノ時ヨリ丑ノ時ニ
駿河風土記ニシルシ
ヲカヲ
雪モロトクカヲ
掬ノトイフサマヲ
ヨメルナリ
温泉ハヲカレトモ
島山義景ノ
宜サヒサマヲ
風土記云上宮聖徳皇子ニ
湯岡側碑文其ニ碑文ノ
處謂伊社邇波之岡也
當土諸人等歓見其碑
率引来因謂伊社尓波
也ト
山集第二熟田津ノ海
ノリセンコト
ニツク哥ノ註ノ憶良ノ類聚歌林ヲ引ク訓明天皇伊与ノ石湯ノ行宮

不盡嶺尓零置雪者六月
十五日消者其夜布里家里
毛曽零計牟

詠不盡山歌一首

高橋蟲麻呂

布士能嶺乎高見恐見天雲毛
伊去羽伐田菜引物結
至伊豫温泉作歌一首并短歌

山部宿禰赤人

皇神祖之神乃御言乃敷座国
能尊母貴寸玉鉾乃道乎
之盡湯毛

皇神祖之神乃御言乃敷座国
能尊母貴寸玉鉾乃道乎
之盡湯毛

反歌

百式紀乃大宮人之飽田津尓
船乗将為年之不知久

小泊のみつのとりみこ天皇御覧昔日猶存之物當時忽起感傷之情所以
因製歌詠為之哀傷也 こゝにいふは舒明天皇にて此湯に行幸ありし
事をおもひ出給ひしなるへし 製歌詠為之哀傷とあるハ歌思辭思之
樹村をみれハ 彼湯のうへに生茂ける樹のむかしのまゝなるを赤人のみることし
そのみのむかしおもひつゝつきまつりかなしむ 彼憶良類聚歌林に一書曰是時宮
前有二樹木班鳩 此米二鳥大集時勅掛稲穂而養之 こゝに仙覚引ところの
風土記に於大殿戸有椹云臣木於其木上集鵤云比米 なとゝいふ集の意にも
まことおほくありき されハむかしの臣乃木も生継て今になりかは
らく歌もいりてよしハ彼此米のことあるへし むかしの樹も多かりしは
彼の米乃事に世にも神のひのこりゆかし先帝乃みゆきせし所とこそ
こと有さ乃おかみや人 かみのかしらんとハ彼時明て思の流の熟田
津にてのりせんと月まてハ潮もかなひぬ 今ハこきこなとよめ
せまし舟の習也 こゝに大人の有のかむかし月をたまふまて
今ハしらくくとえ 但此月まてハの哥ハ集にハ額田王の哥とあるハ大人
人こハいはおもひみをよ
かるみや作らん

登神岳作歌一首并短歌

山部宿禰赤人

三諸乃 神名備山尓 五百枝刺
みもろのかみなびやまにいほえさし
繁生有 都賀乃樹乃 弥継嗣尓
しゝにおひたるつかのきのいやつきつきに
玉葛 絶事無 在管裳
たまかつらたゆることなくありつゝも
不止将通 明日香能 舊京都者
やますかよはんあすかのふるきみやこは
山高三 河登保志呂之 春日者
山たかみ河とほしろし春の日は
山四見容之 秋夜者 河四清之
山し見かほし秋のよは河しさやけし
旦雲二 多頭羽亂 夕霧丹
あさ雲にたつはみたれてゆふきりに
河津者驟 毎見
かはつはさはく見ることにね
哭耳所泣 古思者
のみなかるゝむかしおもへは

登神岳 仙ハカミヤニ 此本并師説ミワヤニ
三諸乃 此本ミモロノヤ三点云
いほえさし 枝のおほき也
つかの木いやつきて
又安云 枝を繁くにさす
あるし五葉つきたるにて
ことゝさん枕詞
玉くつ 絶ることの
枕詞 うすものゝあるき
都ハ 故郷ても旧宮也
おほむかしを云 京の習見
山たかくして 皆山をいふ
むかし詞也 又安云 山高見也
山志 みまほし 志ハ助字也
みのほし 見まほし也 又云
能伎山をみるよしとそ

反歌

明日香河　川余藤　不去　立霧乃
（明日香河川淀に立つ霧のように）

つねなくあれば　孤悲爾　不有　國
（常なくあれば　恋しくあらぬ国）

念遣
（思いやるすべもなくて）

在難波見漁父燭光作歌一首
（難波に在りて漁父の燭光を見て作る歌一首）

門部王

乳渡者明石之浦尓　焼火乃
（乳渡る者は明石の浦に焼く火の）

保尓曽出流妹尓恋久
（ほにぞ出る妹に恋ひ久）

可伊氣無有
（かいけむあり）

或娘子等賜裹乾鰒戯請哭願時作歌一首
（或る娘子等に裹み乾鰒を賜ひ戯れ請ひ哭き願ふ時に作る歌一首）

通觀

海若之奥尓持行而雖放
（海若の奥に持ち行きて放てども）

宇礼孕曽此之鮑生
（憂れ孕ぞこの鮑生く）

うまもよし　彼干鰒を　俺ろくるつと　ホレアハヒ
（うまもよし　彼の干鰒を　俺ろくるつと）

いはまろこれら　死ぬべきこころ　しれ児ども　干鰒もがりと
（いはまろこれら　死ぬべきこころ　しれ児ども　干鰒もがりと）

しこいえんとく　沖おりく　放つともこに　いつこより　来しかいはまを
（しこいえんとく　沖おりく　放つともこに　いつこより　来しかいはまを）

きこりをけとよう　ものしらに　ちりのみや
（きこりをけとよう　ものしらに　ちりのみや）

そこはちく乃　彩郎乃
（そこはちく乃　彩郎乃）

さりうちくのよう
（さりうちくのよう）

ちくしを毋去おこ
（ちくしを毋去おこ）

防人　東國乃兵士ヲ大宰府ノ古儀ニ依リ筑紫ニ遣ス事也
（防人　東國乃兵士を大宰府の古儀に依り筑紫に遣す事也）

やすみしる　わがおほきみの
（やすみしる　わがおほきみの）

あすよせる　のみこ或ハ知ノ字ニ作ル
（あすよせる　のみこ或は知の字に作る）

ちちの乃　苑ハ春日乃神山ニ在リ
（ちちの乃　苑は春日乃神山に在り）

ふりさけて　南風吹けば
（ふりさけて　南風吹けば）

一首
（一首）

太宰少貳小野老朝臣
（太宰少貳小野老朝臣）

青丹吉　寧樂京師者　咲花乃
（青丹吉　寧樂京師者　咲花乃）

薫如　今盛有
（薫如　今盛有）

ふるきみやこと　いやさかりなり
（ふるきみやこと　いやさかりなり）

二首
（二首）

防人司佑大伴四綱
（防人司佑大伴四綱）

安見知之　吾王　乃敷座在
（安見知之　吾王　乃敷座在）

やすみしる　わがおほきみの　しきいます
（やすみしる　わがおほきみの　しきいます）

中者京師所念
（中者京師所念）

かぎろひの　もえたつ見れば　かへりくる
（かぎろひの　もえたつ見れば　かへりくる）

藤浪之花者盛尓成来
（藤浪之花者盛尓成来）

なりにけるかも
（なりにけるかも）

平城京
（平城京）

御念乃
（御念乃）

なるかもと　ねもころ君が
（なるかもと　ねもころ君が）

おもほせるかも
（おもほせるかも）

万二上ノ九二

五首

帥大伴卿（旅人）

吾盛（さかり）　後将（のち）レ喪（うせ）八方（やも）　歎（なげき）

わがさかりまたをちめやもおほとものみやこをおもふ

寧楽（なら）京（みやこ）

平（たひら）　不見（みず）　狭将（さしも）レ成（なる）

あをによしならのみやこをみずてやもさしもあるべき

吾（わが）　令（つかは）　毛（け）　常（つね）　有（あり）　奴可（ぬか）　昔（むかし）　見之（みしが）

わがいのちもつねにあらぬかむかしみしやどをまたもみむかも

象（きさ）　小河（をかは）　平（たひら）　行（ゆき）　為（ため）

きさのをかをたひらにゆきめぐりんためこそ

淺茅原（あさぢはら）　曲（わた）　二物念者（ふたものおもふひと）

あさぢはらわたりつつこれやこのふたものおもふとへるかも

故（ふる）　郷（さと）　之（の）　所念（おもほゆ）　可聞（かも）

ふるさとのおもほゆるかも

大宰府ニ在テ梅花ノ歌三十二首

天平二年正月十三日ニ、帥大伴卿ノ宅ニ集ヒテ、宴会ヲ申ブ。時ニ、初春ノ令月ニシテ、気淑ク風和ラギ、梅ハ鏡前ノ粉ヲ開キ、蘭ハ珮後ノ香ヲ薫ラス。加之、曙ノ嶺ニ雲移リ、松ハ羅ヲ掛ケテ翠ヲ傾ケ、夕ノ岫ニ霧結ビ、鳥ハ穀ニ封ジラレテ林ニ迷フ。庭ニハ新蝶舞ヒ、空ニハ故雁帰ル。ココニ、天ヲ蓋トシ地ヲ坐トシ、膝ヲ促ケ觴ヲ飛ス。一室ノ裏ニハ、交ヘ衿ノ友自ラ和ミ、万里ノ外ニハ、孤ノ情ヲ抱キ、ヒトリ思ヒヲ成ス。淡然自ラ放ニシテ、快ク大ニ排ヒヲ忘ル。若シ、此ニアラスハ、何ヲ以テカ情ヲ攄ヘム。古ノ人ノ曰ハク、「落梅ノ篇ハ、已ニ古ノ曲ニ叶ヒ、折柳ノ義ハ、今ノ世ニ用ヒラル。」ト。宜シク、園ノ梅ヲ賦シテ、聊ニ短詠ヲ成スヘシ。

筑紫（つくし）　令（しむ）　造（つくる）　観世音寺（くわんぜおんじ）

訳語田（をさだ）　渕（ふち）　歌一首　続日本紀ニ云養老七年二月遣僧滿誓於

わすれぐさわがひもにつくときのはなこれをしるしとしらまくもおほし

萱草（わすれぐさ）　吾（わが）　紐（ひも）　二（に）　付（つく）　香具山（かぐやま）　乃（の）

故（ふる）　去之（さりにし）　里（さと）　平（たひら）　不忘（わすれぬ）　之（の）　為（ため）

わすれぐさわがひもにつくいにしへのふるさとをわすれぬがため

吾（わが）　行（ゆき）　者（は）　久（ひさ）　不有（あらず）　夢乃（いめの）　和太（わだ）

わがゆきはひさしくあらじいめのわだ

湍（せ）　者（は）　不成（ならず）　而（て）　淵（ふち）　毛（も）

なりにてあるすくもありこそ

梅花ノ歌三十二首

正月ノ十三日ニ、帥大伴卿ノ宅ニ集ヒテ、宴会ヲ申ブ。時ニ、初春ノ令月ニシテ、気淑ク風和ラギ、梅ハ鏡前ノ粉ヲ開キ、蘭ハ珮後ノ香ヲ薫ラス。加之、曙ノ嶺ニ雲移リ、松ハ羅ヲ掛ケテ翠ヲ傾ケ、夕ノ岫ニ霧結ビ、鳥ハ穀ニ封ジラレテ林ニ迷フ。庭ニハ新蝶舞ヒ、空ニハ故雁帰ル。ココニ、天ヲ蓋トシ地ヲ坐トシ、膝ヲ促ケ觴ヲ飛ス。一室ノ裏ニハ、交ヘ衿ノ友自ラ和ミ、万里ノ外ニハ、孤ノ情ヲ抱キ、ヒトリ思ヒヲ成ス。淡然自ラ放ニシテ、快ク大ニ排ヒヲ忘ル。若シ、此ニアラスハ、何ヲ以テカ情ヲ攄ヘム。古ノ人ノ曰ハク、「落梅ノ篇ハ、已ニ古ノ曲ニ叶ヒ、折柳ノ義ハ、今ノ世ニ用ヒラル。」ト。宜シク、園ノ梅ヲ賦シテ、聊ニ短詠ヲ成スヘシ。

大足彦忍代別天皇御宇
十八年五月壬辰朔從葦
北發船到火國於是日沒
夜冥不知着岸遥見火
光指火往之即得着岸
天皇問其火之處曰何謂邑國人對曰是八代縣豊村亦曷其火是誰人之
火也然不得主玆知非人火故名其國曰火國
心敬愼故私語小聲
曰事有忌諱之日
らんそ
其母存
らんそ
貫之万葉の表紙
かけ置宝安
ありける
ありけり

白縫 筑紫乃綿者身着而
未者妓袮肝暖
いまねこあるかも
所見

沙彌滿誓

万三上 九四

罷宴歌一首 酒宴をやめて
山上憶良臣

憶良等者今者將罷
子將哭
其彼母毛吾平將待曽
あの母もわれをまつらん

讃酒歌十三首

大宰帥大伴旅人卿

験無物乎不念者一坏乃濁酒乎可飲
有良師
古昔聖賢所為
之七賢等
欲為物者酒西有良師

古昔聖賢所為
之七賢等
欲為物者酒西有良師

賢 跡物 言 從者酒飲而
ひとことものいわさけのむ
口 醉吟 為 師 益 有良之
くちよひなきさすがにおのれ
將言 為使 將為 使の 不知 極
いえんとぜんとをきわめて
貴ふかき物 者酒 西 有良之
たうときこころの酒のみ
中中尓 人跡 不有者 酒壺 二
なかなかに人とあらざるは
戒 而 師鴨 酒二徐 嘗
いましめてしかもなめん
痛醜 贊 良平 為跡 酒 不飲
なかるべきさけらをすすめて
人平 熟み見者 猿 二鴨
ひとをみるにさるにかも
似
三

万三上ノ九五

價 無 寶 跡 言十方 一 坏乃
あたひなきたからとこそいふひとつきの
獨 酒尓 豈 益 月八
ひとりのむさけのみてや
夜 光 玉 跡 言十方 酒 飲而
よるひかるたまこそいふさけのみて
情 平 遣 爾 豈 若月八方
こころをやるにしかめやも
世 間之 遊 冷 道尓 者
世のあそびおろかなるみちにて
醉 江 為 尓 可有 良師
よいするをえらばしめ
今 世代尓之 樂 有者來生之代者
いまよのたのしみあらばこんよのよは
蟲尓 鳥 尓毛 吾 羽成 奈武
むしにとりにもわれはなりなん
生 者 遂 毛死 物 尓 有 者
いけるひとはつひにもしぬるものにあれば
今生 在 間者 樂 平 有 名
このよのあいだはたのしくてなを

黙然 居而賢良ぐらひ為者飲酒而
まくは酒の楽しきを云
酔泣 為爾尚不如の来
けん人はおのれもしかる
祇曰酒をのみてのち
めでたきことをいふなり

一首 沙彌滿誓 仙
世間乎何物布将譬旦開ヲシ
とふなるごとくさとらん
榜去師舩之跡無如
山哥或本六世のほとけ
こきゆくふねのあとなきごと
のみちとふ意の次
ろかりしこふみて
こゝは酒のみてかしこき
吉川さるまでもなく愚夫愚婦も
食終夜不寝思無益不如且飲とつゞけ
大伴卿乃賛酒哥八酒徳頌酒功賛等を似りけん
世乃あらをはかなみ類聚万葉拾遺集ともに釈教
さとりをひらかんと
ねがひ給ひしこゝろ
ばへなるべし

一首 若湯座王
幸遊 波鶴之哭鳴而潮風
寒吹良武津乎能埼
羽毛さましもを

一首 釋通觀
見吉野之高城乃山尓白雲者
行憚而棚引所見

一首 日置小老
縄乃浦尓塩焼煙夕去者
行過不得而山尓棚引

一首 生石村主真人

大汝小汝 珍名乃 将座
おほなむちすくなひこなかつくに
志都乃石室者 幾代将經
しつのいしやはこそいくよへぬらん

一首 上古麻呂

今日 可聞 明日香乃河乃夕不離
けふもかもあすかのかはのゆふされす
鳴瀬之清 有良武
なるせのきよくあらんかも

一云 明日香川 今毛可毛 等奈
アスカカハケフモカモトナ

六首 山邊宿禰赤人

縄 浦從 背向尓所見 奥島
おそかうらゆ そがひにみゆる おくのしま
榜廻 舟者釣 為良下
こきたもとほる ふねはつるらし

武庫浦乎 榜轉 小舟 粟嶋矣
むこのうらを こきたもとほる をふねは あはしまを

背尓見乍 小舟
そがひにみつつ をふねは

榜隠所見
こきかくるみゆ

阿倍乃嶋 守乃 任尓 石尓依浪
あへのしま もりのまけに いそによるなみ

聞無 比來 日李 師 所念
きこえなく このころの ひにけに おもほゆ

鹽干者 玉藻刈藏 家妹之
しほひなは たまもかりてめ いへのいもが

當乎 将見左右
あたりをみむ

濱邊 者何矣 示
はまへをと こころあなを しめさんに

我風乃 寒 朝開平 佐農能岡
わかかぜの さむき あさけたつ さのをかの

辨起 公尓衣 借益矣
わきたち きみにころも かしまさりを

妻 沙居 石川轉尓 生 名衆 藤乃
つま すさゐ いしかはまろに おふる なのりそ ふぢの

名者告志 五余親 者知 友
なはのらし いよよしたしく はしるとも

一云 妻沙居 藻 名
あるいはいう つまとすさゐる もの なのりそ

殘尓 生 名
のこれる おふる なのりそ

菜摘乃告者告世父母者知友
のりつのものりつけよ我は知らじ

鹽津山作歌二首

笠朝臣金村

大夫之弓上振起射都流矢乎
ますらをの弓末振り起し射る矢を

後将見人者語継金
後見む人は語り継ぎかね

鹽津山打越去者我衆有
鹽津山打ち越え去にし我が衆

云妹嬬良霜
いもは待つらむ嬬ら霜

馬数多来有一云家恋良霜
馬数多く来たり一云家恋ふらし

右一首或云笠朝臣金村
右の一首は或は笠朝臣金村

雖在河辺宮人歌也
河辺宮に在りし人の歌なり

角鹿津蚊島松原歌一首并短歌

笠朝臣金村

越海之角鹿乃濱従大舟尓
越の海の角鹿の濱ゆ大船に

真梶貫下勇魚取海路爾
真梶貫き下し勇魚取り海路に

出而阿倍寸管我榜行者大
出でて阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女鹽
王の手結が浦に海未通女ら

焼煙草枕客之有者獨
焼く煙草枕旅にしあれば獨

見知師無美綿津海乃
見知る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

反歌

越海之角鹿乃浜従大舟尓
越の海の角鹿の浜ゆ大船に

真梶繁下勇魚取海路尓
真梶繁き下し勇魚取り海路に

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

塩焼煙草枕客之有者
塩焼く煙草枕旅にしあれば

或云塩焼煙
或は塩焼く煙

獨見知師無美綿津海乃
獨見る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

角鹿津蚊島松原歌一首并短歌

笠朝臣金村

越海之角鹿乃浜従大舟尓
越の海の角鹿の浜ゆ大船に

真梶繁下勇魚取海路尓
真梶繁き下し勇魚取り海路に

出而阿倍寸管我榜行者大
出でて阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

焼煙草枕客之有者獨
焼く煙草枕旅にしあれば獨

見知師無美綿津海乃
見知る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

反歌

越海之角鹿乃浜従大舟尓
越の海の角鹿の浜ゆ大船に

真梶繁下勇魚取海路尓
真梶繁き下し勇魚取り海路に

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

塩焼煙草枕客之有者
塩焼く煙草枕旅にしあれば

或云塩焼煙
或は塩焼く煙

獨見知師無美綿津海乃
獨見る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

角鹿津蚊島松原歌一首并短歌

笠朝臣金村

越海之角鹿乃浜従大舟尓
越の海の角鹿の浜ゆ大船に

真梶繁下勇魚取海路尓
真梶繁き下し勇魚取り海路に

出而阿倍寸管我榜行者大
出でて阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

焼煙草枕客之有者獨
焼く煙草枕旅にしあれば獨

見知師無美綿津海乃
見知る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

反歌

越海之角鹿乃浜従大舟尓
越の海の角鹿の浜ゆ大船に

真梶繁下勇魚取海路尓
真梶繁き下し勇魚取り海路に

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

或云阿倍寸管我榜行者大
或は阿倍の水門我が漕ぎ行けば大

王乃手結我浦尓海未通女
王の手結が浦に海未通女ら

塩焼煙草枕客之有者
塩焼く煙草枕旅にしあれば

或云塩焼煙
或は塩焼く煙

獨見知師無美綿津海乃
獨見る師なみ綿津海の

奥乎深見可母思恋将居
奥を深みかも思ひ恋ひ居む

或云妹尓恋乍将居
或は妹に恋ひつつ居らむ

手二巻四而有珠手次懸而
之勞攬日本島掃乎
志乃比川毛母登
反歌
越海乃手結之浦矣客為而
見者之日本思櫃
一首
大船二真楫繁貫大王之
御食恐殘廻為鴨
右今案石上朝臣乙麻呂任越前
国守蓋此大夫飲
和歌作者未詳一云笠朝臣
金村之作也

手二巻四而有珠手次懸而
之勞攬日本島掃乎
志乃比川毛母登
反歌
越海乃手結之浦矣客為而
見者之日本思櫃
一首
大船二真楫繁貫大王之
御食恐殘廻為鴨
右今案石上朝臣乙麻呂任越前
国守蓋此大夫飲
和歌作者未詳一云笠朝臣
金村之作也

物部乃臣之壮士者大王乃
任乃隨意聞咲古物曽
安倍廣庭卿
雨不零雲流夜之間濕路
戀作居寸君待香光
思京歌一首
飲海乃河原之乳鳥
吾佐保河乃清念國
汝鳴者

物部乃臣之壮士者大王乃
任乃隨意聞咲古物曽
安倍廣庭卿
雨不零雲流夜之間濕路
戀作居寸君待香光
思京歌一首
飲海乃河原之乳鳥
吾佐保河乃清念國
汝鳴者

涼夜乃夜くせまぬきひつゝらくひかでしつ恋つてきるまゝし
堺女の海乃浜原のま為ぞ将らせ八宅比於木出云よくなりなけハむとして
油かるけなしま為を竿門部王出雲守に任て任国乃意宇郡まて
為ゐ事を堺けハ古て春の都のさかのりつ乃ま為をおもひてよりしを
とその目とハ春の
春日とかすがとよむ祭
枕詞小とるの目をと云返
高座(タカクラ)之御笠(ミカサ)ハ安芸帝
王乃御在ハ高御座(タカミクラ)と云
とまる在の後笠とつくる
ハ王乃上乃蓋(カサ)や
知らとらす毎朝
かから 借ハかくとて
走と名とせるゝ五為高
流ハ見かりきてる為返
雲ゐるるそ心いさまい

登(ノボリテ)春日野(ニ)作(ル)歌一首并短歌

山部宿禰赤人

春日乎 春日乃山乃高座之
はるひを かすかのやまの たかくらの
御笠乃山尓朝不離 雲居多奈引 雲居奈須
みかさの山にあさゝらす くもゐたなひき くもゐなす
容鳥能間無數鳴
かほとりの まなくしはなく
心射左欲吠 其鳥乃片戀耳二
こゝろいさよひ そのとりの かたこひのみに
晝者毛日之盡 夜者毛夜之盡
ひるはも ひのことこと よるはも よのことこと
立而居而念曾吾爲流不相兒
たちてゐて おもひそわかする あはぬこ

心をもにこよろふ池
まさのかき恋 良為の
片思ひの恋をなつかり
我も片恋に昼夜比
恋居よとかくなるとも
まりくの身きのまよ
ばおのく為も良為と云
よゐはしのまなりてく
あくと昼夜を云て
徒ぬ恋かなる心を云て
高まハしんとおかる
笠乃山大和と為人ね
まひつるも御よる
てよききするわるれと
吉野なる夏実の河乃
大和と山城乃人等々川

故荷
ゆへに

反歌

高按之三笠乃山尓鳴鳥之 止者繼流戀哭爲鴨
たかくらの みかさの山に なくとりの やめはつかるゝ こひもするかも

一首　石上乙麻呂(ヲトマロ)朝臣

雨零者將蓋跡念有笠乃山 人尓莫令蓋 霑者漬跡裳
あめふらは きんとおもへる かさのやま 人になきせそ ぬれはひつとも

芳野(ヨシノ)作(ヲ)歌一首

湯原王(ユハラ)

吉野尓有夏實之河乃川余杼尓
よしのなる なつみの川の かはよとに

隣曽嶋成　山影尓之成

宴席歌二首　湯原王

秋津羽之　袖振　妹乎　珠匣
奥尓　念乎見鴨　吾君
青山之　嶺乃白雲　朝尓　食尓
将見　村毛目頬四　吾君
恒見　飽奴事哉　三

宴席歌二首

詠故太政大臣藤原家山池歌一首

故太政大臣藤原家
不比等　元正帝　養老四

年八月二日薨　贈太政大臣正一位　故置始之

山部宿禰赤人

深　堤者　年　生　家里
池之　水草　尓　生
昔者之　舊

祭神歌一首　并短歌　天平五　寺冬十一月祭大伴氏神時作之

大伴坂上郎女

久堅之　天原従　生来
ひさかたの　あまのはらより　なれきて
神之命　奥山乃　賢木之枝尓
白香付　木綿取付而　齋戸乎
祈白　十六自物　膝折　伏手弱
忌瓮居　竹玉乎繁尓　貫垂
いはひほり　すゑつひろ　ゆふかたを
かみのみこと　おくやまの　さかきのえだに
しらかつけ　ゆふとりつけて　いはひほり
すゑつひろ　ゆふかたを　いみへをき
竹玉を　しじに　ぬきさげ
いはひへに　ゆふだすきを　かけまくも
あやに　かしこし　かみのみこと

高皇産霊尊　神武天皇　称

大伴氏神　遠祖　道臣命　神武天皇　称

大伴氏神　氏人　奉

尊　祖　祭　子孫　絶事　無

高皇産霊尊と　神武天皇と　称て　大伴の氏神を　氏人を　奉る　祖と　祭る　子孫の　絶る事　無

女之押日取懸　如此谷　吾者
やめりのゆひとりかけかくだにも　われハ
折奈牟君尓不相可聞
をりなんきみにあはぬかも

反歌

木綿畳手取持而如此谷母
ゆふたゝみてにとりもちてかくだにも
香波乞掌君尓不相鴨
われハこひなんきみにあはぬかも

嬢の号を授けしことを　るる植倉と崖倉と名けり又筑波の邑に居志むかし日本紀に多し　多ふての原ちり生末とき　ちゝり流け出立け　仙日志らんハ志ろ武乃四身之邑自幣かゝく　ゆふしき麻ゆふのもと本綿綿木綿ハ之を言ふにきこしたるも　ゆふたゝみといへるハ神酒をかとする瓶に又安日酒なるかゝ月ゝ名をもてかぬきされ　又安云竹乃ゆれやうにつぬさゝく神よそよと　仙日陰陽家乃説なり　竹を玉のやうにむさき　く神供乃中にかけて　いさゝか空ひ奥まもを　結ぶ給けんし　与てもね　又安　鹿乃やうにひさをおりくとにて　ことやめこ乃女自縁ニ之　押日とかゆ　義をなしあまを蠻に縁つるも　彼志し猶ひさお伏せ　とゆをえけてくぶ我ハ膝おを押て　行るに我承承就すなれとも

出しまみるにれ放く　けるしちふれ站合と同じかも　乞ちんハわとこいへおりふところすゝむる　家葉をいひおもこてし　心をそやりて毋もし　あるる葛海の浪路をよき風待ちて　たつせとし

贈筑紫娘子歌一首　宇児島
家登情進莫風候
いへおもふところすゝむなかせまもらく
好為而伊麻世荒其路
よくしていませあらきそのみち

此筑波岳　常陸風土記云
大照大神はしめの　坐して
翔ひゆ世の中に鹿島の関
波をふのぼりて此山に上り
つまりおりて筑波山ハ
弓波の上りし西をふるお
けりの関こしとく
うゝらのふくりし山
仙日友筐ハうらいに常
小えもよれりくれハ之に

登筑波岳作歌一首并短歌　丹比真人国人
鶏之鳴東国尓高山者
とりがなくあづまのくにゝたかやまは
左波尓雖有明神之貴
さはにあれどもあきつかみのたふとき
山乃儕立乃見果石山跡神代従
山のなみたちのみがほしやまと神代より
人之言嗣国見為筑羽乃
ひとのいひつぎくにみするつくはの

山矣 冬木成 時敷時 ここをしく 時跡不見而
山を みこもり こそ 時 しるく
徃者 益而戀 石見 雪消為
いにしへ ゆ まして こひ 石見 雪消 の
道尚矣 名積 叙吾来 前一
みち なほ を なつみ そわれ くる よ

反歌

筑羽根矣四十 耳 乍見 有金手
つくばねを よそ に のみ 見 つつ 有 かね て
雪消乃 道矣 名積 来有鴨
雪 け の みち を なつみ くる かも

一首 山部宿禰赤人

吾屋戸尓 韓藍 蘇 種 生 之 雖干 不懲 而 亦 毛 將蒔 登曽 念
わ が やど に 韓藍 蘇 (一種 くれなゐ の 名) 生 し 雖干 懲 ず て 亦 も 將蒔 と 曽 念

仙柘枝歌三首

(ヒトツミキナ)

裏 麥 吉志美我高嶺乎 険 跡
うら 麥 きしみ が たかね を 険 と

うれはしきみ ねをさしみ と
草取 可奈和 妹 手平 取
くさとる かなわ いも が て を とる

まくらべる くまや しもとり
多豆乃(タヅノ)ブスリシテ(ニテ)カブラ(カ)ノ登望樂飲歌舞曲盡而即歌曰

多豆乃(タヅノ)ブスリシテ(ニテ)カブラ(カ)ノ登望樂飲歌舞曲盡而即歌曰
多豆乃 ふすりして かぶら の 登望 楽 飲歌舞 曲 尽 て 即 歌 曰

アラレフルキレニガタケヲサカレミト草トリカテ、妹カ手シトル是柘島曲ニアル
あられ ふる きれ に が たけ を さかれ み と 草 とり かて 、 妹 が 手 し とる 是 柘島 曲 に ある

ふす集乃 宮 尓 行 毛 我 毛 之 人 目 多 乎 見 牟 為 跡 曽 我 母 我 母 之
ふす集 の 宮 に 行 も 我 も し 人 目 多 を 見 む 為 と 曽 我 も が も し

重或本云右一首或云吉野人味稲與柘枝仙嬢歌也但見柘枝傳無者此歌
重 或本 云 右 一首 或 云 吉野人 味稲 與 柘枝仙嬢 歌也 但 見 柘枝傳 無 者 此 歌

ぱそれかつみのさ枝乃
仙曰柘ハ菜のすり例て
斬ものまことそ
重菜下句やきてそ

仙曰此ハ肥前國風土記
そこ乃ヶ杵島郡縣南
二里有一孤山從坤指艮三
峰相連ル号名曰杵島坤ハ
者曰比古神中者曰比賣
神艮者曰御子神一名
神 聞士女提酒抱琴ヲ毎歳春秋携手登望樂飲歌舞曲盡而即歌曰

神 聞士女提酒抱琴ヲ毎歳春秋携手登望樂飲歌舞曲盡而即歌曰
神 聞士女 提酒 抱琴 を 毎歳 春秋 携手 登望 楽飲 歌舞 曲 尽 て 即 歌 曰

アラレフルキレニガタケヲサカレミト草トリカテ、妹カ手シトル是杵島曲ニアル
あられ ふる きれ に が たけ を さかれ み と 草 とり かて 、 妹 が 手 し とる 是 杵島 曲 に ある

ふす集乃 宮 尓 行 毛 我 毛 之 人 目 多 乎 見 牟 為 跡 曽 我 母 我 母 之
ふす集 の 宮 に 行 も 我 も し 人 目 多 を 見 む 為 と 曽 我 も が も し

重或本云右一首或云吉野人味稲與柘枝仙嬢歌也但見柘枝傳無者此歌
重 或本 云 右 一首 或 云 吉野人 味稲 與 柘枝仙嬢 歌也 但 見 柘枝傳 無 者 此 歌

ぱそれかつみのさ枝乃 柘 之 枝 乃 流 来 者
仙曰柘ハ菜のすり例て 柘 之 枝 乃 流 来 者
斬ものまことそ 梁 打 不取 香聞 將有
重菜下句やきてそ 梁 打 而 不取 香聞 將有
古 尓 梁 打 人 無 有 世伐
いにしへ に やな うつ ひと なく あら せば

此間毛有益柿之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂

或本云

羇旅歌一首并短歌

海若者靈寸物香淡路島中
ワカミヤノアユ　タビ

ホ立置而白浪乎伊与尓廻之
ホ

座待月開乃門従者暮去者
ヨヒサレ

鹽乎令滿者明去者鹽乎令干
シホヲミチシムレハアケサレハシホヲヒシム

鳥乎多頭能浪乎恐美淡路
タツ　ヲ　タヅ　ナミヲカシコミ

嶋磯隠居而何時鴨此夜乃
シマ

将明跡待従爾寐乃不勝宿者
アケムトマチケムニイノネカテニ

里二里者雖有今夜乃月清
サトニハアレトモ

十八日見
トヲカノヒ

或本云

右一首若宮年魚麻呂

反歌

敷島乃倭乃国波浅野之雉
シキシマノ　ヤマトノクニハ　キヌ

子乃朝立徃跡聞去歳
ケノアサタチユクトキキテシ

立動倍而榜
タチトヨミ　ヘテ　コ

出年之顕氣師
イテシトシノ　ウルハシケシ

島傳敏馬乃崎乎許藝廻者
シマツタヒ　ミヌメノサキヲ　コギモトホレハ

日本戀久鶴鳴
ヤマトコヒ　ヒサニツルナク

或本云

右歌若宮年魚麻呂誦之但未審作者

譬喩歌

御歌一首

紀皇女

寄ニ弓喩思ヲ寄と云り
唯寄物寄之 奥儀ニ
曰譬喩ハ六義の風
比興に通ふる也 蒼日
毛詩并ニ万葉ニ見て
より風比興に今譬喩
也但どの乃ら別る所も
題をあらハさすして物
おこめて偏かされば
ていろ比ハ物をとりて

軽池之納廻往転留鴨尚尓
玉藻乃於丹独宿名久二

かるのいけのいりえめぐれるかもすらに
たまものうへにひとりねなくに

造筑紫観世音寺別当沙弥満誓
一首

鳥総立足柄山尓船木伐
樹尓伐帰都安多良船材乎

とぶさたてあしがら山にふなぎきり
きにきりゆきつあたら舟木を

これハ比喩にて世の中をよそへて己が心をとりて
ら以す 玉葉 仙覚抄に云ことぞむねとして 思の事によそへと此の心によみ
かる乃池乃いりえめぐれる 八雲抄云かるの池大和 磯回いて乃池をもいふ也
こも鴨をとりてハ一ツある君をも人によそへてよめり 入江めぐれる鴨をもとい
鴨ハ玉藻の床ありと思ひくらし床にいねたるをも ひとりねなくに思ひの
あらねどもひとりねる事を恨てよめり 玉葉 鴨ともにさそひをの下也

とぶさたてハ山 八雲抄 袖中抄 童蒙抄ありとしるさまへいりと
いふ八雲云とぶさハ木の梢を枷りハて木を切て八必其木の末をたてゝまつ
ることを記ありたる也 またハ何とよめるも此とりて何といふよめる也 舟木ハ舟を
するときの足柄山より多く木をきりける 玉葉 此歌ハ義いふ略也 但しまつへするに
とりさたす所説に足柄山と舟の足軽さによそへて 譲ハ不譬喩の也 足柄小舟も後撰之
童蒙抄云とふさハ諸を云也 八雲抄云いつきたるも舟の木を切る磯回ふさふさと六
その木をもさりて木を切る時屑のちるをハ木とも 舟木ハ多くの舟をいひならう
乃木に切もあへす こする也 舟ハ松木にてつくる事といひあはれハ 枝ハ小木にもあれ
にも舟ありせねとされハ舟木をもとよめり 心ハ此の身と思ふにちかくある事
人の心のあはれやし しのひしらすにあひきぬ事ハ何としてかまをとしよめる
玉葉に磯辺ハあらたにきりよせけりと思する事にハ仙覚抄乃義を用ひて
仙覚乃譬喩の事あらハすこと思ふ故に此の事とハりたりとみゆる

梅歌一首 大宰大監大伴宿祢百代

烏珠之其夜乃梅乎手忘而
不折来家里思之物乎

ぬばたまのそのよの梅をたわすれて
をらずきにけりおもひしものを

かハし心をひくて用之
ぬくおもひの其の梅を
とわすれてハ忘れ
あるし旧けり人の事を

月歌一首 満誓沙弥

不所見十方 不戀有来 山之赤ホ
[illegible] 射狭夜歴月平 外
見而思香
[illegible]

一首 娘子

[illegible] 而我定 義之任吉乃
濱乃小松 者後毛 吾松
[illegible]

贈大伴宿禰家持歌三首 笠女郎

[illegible] 馬野尓生流紫 衣染
[illegible] 未眼 而色尓出来
[illegible]

[illegible] 真野乃草原 雖遠
[illegible] 面影 為而所見云物平深目手
[illegible] 奥山之磐本菅 平根
[illegible] 結 之情忘 不得
[illegible]

梅歌二首 藤原朝臣八束

妹家尓開有 梅之何時毛ここに
[illegible] 将咲 梅乃いつもしく
[illegible] 将成 時尓事者 将定
[illegible]

妹家尓開有 梅花之梅乃花
[illegible] 実之成 名者花尓
[illegible]

梅歌一首 大伴宿祢駿河麻呂

梅花開而落去登人者銀去
うめのはなさきてちりぬと人にいふと
吾標結之枝將有
わかしめゆひし枝をあらんやと

宴親族日吟歌一首

大伴坂上郎女

山守之有家留不知尓其山尓
やまもりのありけるしらにそのやまに
標結立而結之厚為都
しめゆひたちてゆひしあつくもあるかも

即和歌一首 大伴宿祢駿河麻呂

山守有家留雖有吾妹子之
やまもりのありけるしらにあれどもわぎもこが
將結標乎人將解哉
ゆひてしめをひとのとかめや

贈大伴坂上家大嬢歌一首

大伴宿禰家持

朝尓食尓往見
あさけにもゆきてみまくほりかわの
如何為鴨從手不離有年
いかにかもよしたゆたはずありねんごろに

報佐伯宿祢赤麻呂歌一首

娘子

千磐破神之社四無有世伐
ちはやぶるかみのやしろしなからせ
春日之野邊粟種益乎
かすがのにあわをまきますを

更贈歌一首 佐伯宿祢赤麻呂

春日野尓 粟種有 世伐 待鹿尓
合而 行益平 社
師留平

継而歌一首 娘子

復辱歌一首 娘子

吾祭 神者不有 大夫尓
社有神 曽 応レ祀
認

嬢大伴坂上家二嬢ニ歌一首

大伴宿祢駿河麻呂

春霞 春日里之 植子水葱
苗有 跡云師柄者 指尓家牟
跡

贈大伴坂上家大嬢歌一首

石竹之 其花尓 大伴宿祢家持
手取 而 不憩日 朝毛我
持 而 不憩日 暮無
見 跡 可レ慰 妹 之 形 乎

一首 大伴宿祢駿河麻呂

一日尓波 千重浪数尓 雖レ念
奈何其 玉 之 巻 難

こうくいこそ玉乃
糸を難さ立八汝
の中よ来玉乃ら難さ
かう人とゆまきか
うてよめるも古
今ひけらも汝の中か
さうれしかるこゝ
家流むる又ひるを
秋かまさくらを誇
まつるを着う

橘歌一首　大伴坂上郎女

橘　平　屋戸ホ　植　生　立而居而
後　雖　悔　験　将有
のちぐくもやすらむと
かねてうえしや
も

和歌一首　作者未詳

吾　妹兒之　屋戸之　橘　甚近
植而師　故二　不成　者　不止
わぎもこがやどの
たちばな　いとちかく
うへてしゆゑに
ならずはやまじ

橘を賀う

橘を我りいとうるはしく立ちたるを見て
作れるうた

今うまれ出たる人の立ちたる姿のうるはしきことこの橘
橘をうつくしきものとよろこびていへるなり

一首　帝原王

伊奈太吉ホ　伎　須賣流玉者　無二
いなだきに　かけるすめる玉ハ　二川な
此方　彼方　毛　君之隨意
こなたかなたも　きみのまにまに

宴吟歌一首　大網公人主

須麻乃海人之　鹽焼　衣乃　藤服
すまのあまの　しほやきぬのの　ふぢごろも
間遠　之　有　者　未二　着一　穢
まとをにし　あれハいまだ　きなれと

一首　大伴宿祢家持

足日木　能　石根　許其思義　菅　根乎
あしひきの　いはねこごしみ　すがのねを
引　者　難三等　標　曽　結鳥
ひけばかたしと　しめぞゆふ

已上譬喩歌